

「信仰復興運動」とモラヴィア教徒の 産業都市建設案，その他雑感

“Evangelical Revival” and the Proposal of Defoe Settling the Refugee Moravians, presented to Premier Godolphin in 1709 etc.

天 川 潤次郎

Defoe's Proposal of Settling the refugee Moravians in New Forest, Hampshire. 'The Way to God' and 'The Way to Wealth', is it applicable to Moravians in North Carolina and California? But 'my old age and weak-sightedness' deterred me from exploring more detailed research.

So here I want to assert a new way of unifying "The Way to God" and "The Way to Wealth" in historical perspective.

Junjiro Amakawa

JEL : N00

キーワード：宗教と経済発展

1. デフォーのモラヴィア教徒の産業都市計画案

旧稿、『経済学論究』62巻3号，21-2頁において恩師大塚久雄教授が「デフォーの産業都市計画」という一文を載せておられるのを引用しましたが，私の著書『デフォー研究』（未来社刊，1966年3月）134，137頁にもっと詳細に跡付けていましたので改めて付加させていただきます。

デフォーは1709年時のウィッグ党宰相G・ゴドルフィン（Godolphin）伯にイギリスのハンプシャーの森 New Forest に神聖ローマ帝国選帝侯領亡命者，いわゆる「ディアスポラ当事者」を内陸植民する計画を自ら立案して提出した

時の案であって、不幸にもアメリカのカロライナ州総督グランヴィルが非国教徒の植民に反対していて挫折した時のものである。デフォー自らはこの計画に非常に執念していて主著 *A Plan of the English Commerce* (1728), pp.15-19; *Tour*, vol.1, pp.200-6; *Review* 誌, vol.6, No.40 にもくわしく説明しているものである。

「国民経済」の成立を象徴するデフォーの著作¹⁾としては注目すべき一文である。

内容は次の如くである。

「産業都市」を建設するための計画案の中心には広大な荒蕪地の中央に町役場、教会、市場広場、水道、墓地などの公共用円形空地があつて、その周囲に 1 区画当たりほぼ 200~300 エーカーの「囲込地」約 50 を区切り、それに約 200~300 £ の農具、牛馬などの資本財を用意しうる裕福な農民 (farmer) を家族 3 人、傭人 3 人と共に土着させ、開墾させる。条件は 20 年間地代免除、住宅建築用の木材は無償提供という有利なもの。

第 2 段階として農家に生活必需品を供給するための「職人階級」を自然に來住させる。例えば農民に食料を供給するためのパン屋、肉屋、鋤鋤などの農具を生産する鍛冶工、靴を供給する靴屋、牛馬の蹄鉄を供給する蹄鉄工、荷車、馬車を建造する車大工、その他の生活必需品を供給する皮細工師、ろくろ師、陶器工、手袋職人、製縄工、染色工、縮絨工、錠前屋、指物師など。外に理髪師、産婆、医者など。大工、煉瓦工、煉瓦積工なども來住させる。これは W・ペンのフィラデルフィア市の建設計画とも軌を一にする。

次に第 3 段階として、これらの農工業者の需要に応ずるため「商人階級」が來住する。「太陽の近づくにつれて熱が伴う如く、商人は人の集合に伴って集合する。」(*Plan*, p.19) と。

かくて飲食店、居酒屋など奢侈産業が増えると共に、ろうそく商、薬屋、絹物商、小間物商、帽子商、毛織物商、婦人装身具商などの商店の種類も増え、醸造業者、桶屋、白ろう工、それに知的職業として弁護士、公証人などの職業も

1) 楠井敏朗『大塚久雄論』(日本経済評論社刊, 2008 年), 266 頁。

大通りに店を構える。他方「自給自足経済」への反対の方向への動きもある。例えば農家の婦人は当然として家で糸を紡ぎ、これを綿、リンネル、毛、麻の織物工へ手渡す。デフォーは職業別人口構成表を作成し、「農，工，商業の割合には一定の順序と比率が存在する」と書いている。

さて、「離散共同体」としてのツィンツェンドルフの率いるモラヴィア教徒がバスレーム市に土着したのは1741-2年のことであって1709年にデフォーがロンドンに近いイギリス南部のハンプシャーの森に土着させんとしたものは約30年の時差が存在するが、いずれにしてもモラヴィア教徒というメソジストに近い「ピエティスト」(Pietist)の一派の植民が考えられたことは彼の先見の明が伺われて興味深い。

それに正に偶然の一致というのか、1741年という年はドイツ人G・ヘンデル(Hendel)²⁾の作曲した有名な『救世主』メサイア(Messiah)が誕生した年として、音楽界においても輝かしい一年である。山内一郎『輝く自由—関西学院の教育的使命』(2009年)、205-7頁にはこのことがくわしく説明せられている。1737年にロンドンに渡ってきたヘンデルは不運にも脳溢血で倒れたが、1741年8月に突然アイルランドの詩人チャールス・ジェネンスから『救世主』作曲の依頼がとびこみ、彼はこれこそ「神の啓示」であると考え、「慰めあれ！」の台詞は正に「天の声」と思われた。こうして3週間部屋に閉じ籠って3部作の美事なオラトリオの名曲を完成したといわれる。1737年はツィンツェンドルフ伯がカンタベリー大主教ポッター師からアメリカ宣教の許可を得た年であって、音楽史とバスレーム市建設の年代の一致は誠に奇すしき妙である。

尚恩師、大塚久雄教授の「デフォウの産業都市計画」については、先生がPlanか、『大ブリテン国旅行記』などによって「1709年のデフォーの、首相ゴドルフィンへ提出した計画案」を知った上で書かれた優れた御意見であることがこの際はっきりしましたので一応弁解しておきます。また翌年の1710年にはアメリカのコトン・マザー師(Rev. Cotton Mather)の有名な著書『善行論』(Bonifacius ; or, Essay to do Good)が出て、マザー師が友人のデフォー

2) Georg F. Händel (1685-1759).

の「奴隷貿易」についての詩句を引用していることは天川、寺本『社会経済史講義』166-8 頁に述べたとおりです。またマザー師は自分の『日記』(Diary)の1711年5月4日付に「デフォー氏と文通し云々」と書いております。それ故デフォーの『経済論』においては「メソジスト」に近いモラヴィア教徒の「アメリカ植民」は重要な要件であって、「奴隷貿易禁止」と共に重要であったと思います。「三人男」のもう一人のフランクリンは『自伝』にその辺りのことについて触れておりますし、ジョン・ウェスレーは1747年に「富の使用法」、1791年死ぬ6日前にウィルバフオース宛に「奴隷貿易禁止」を願う手紙を書いております。「奴隷貿易禁止」は1807年に実現されましたが。

2. モラヴィア教徒のセイレム (Salem) 定住と北カロライナ学術研究三角地域 (North Carolina Research Triangle Park) の成立

本節と次節「シリコン・ヴァレーのハイテク産業の発達」についてはやはり関学大国際学部教授の宮田由紀夫教授の優れた著書『アメリカにおける大学の地域貢献，産学連携の事例研究』(中央経済社，2009年刊)に依存する外，門外漢の私の知識ではどうにもならないので，同書から自由に一勿論同教授の許可をえて一引用させていただくことをおことわりしたい³⁾。

北カロライナ州ではその西部にミッチェル山(2037m)の高峯を控え，俄々たる山脈が聳え，従ってその産業構成も林業，農業，タバコ産業，織物業，鉄工業など多角的に亘った。

例えば基本産業である農業も Levi Branson 牧師の述べる如く，一軒当り耕地面積は狭く，穀物よりも[・]玉[・]も[・]ろ[・]こ[・]しを多く作った。また Hugh T. Lefler⁴⁾曰く，そのガストン郡においてはモラヴィア教徒を中心に鉄工業が盛んであったと。

1882年なめし皮職人 C・ガイトナーというモラヴィア教徒はペンシルヴェニア州のリティッツでは皮なめし用の樹皮がなくなったので，それが多い北カロライナ州のガストニア北のヒッコリーに移住している。またこの地域には

3) 宮田「同書」，70，120，123，129，132，136，148，170，195頁など。

4) L. Pope, *Millhands & Preachers*, p.6.

「ベッセマータウン」という地名までである。

1741-42年にこの地に集団移住したモラヴィア教徒は1800年11月に上院議員ショーバーの指導の下に2000人が集まり、ツィンツェンドルフ作の賛美歌を歌ってトロンボーン合唱祭を催した。Wachoviaを中心とする地方で、この点私の研究不足である。

Lipton Pope, *Millhands and Preachers, A Study of Gastonia*, 1940.によると、その綿工業において1934年から39年に亘ってその労働者と左翼思想家の間で激しいスト、抗争が行われた。「家父長的資本主義」の考え方を沁みこまされた労働者はストを「忘恩の行為」、「不可思議な裏切り行為」と考え、モラヴィア教徒の多いウィンストン・セイレムのHonesesでもようやく「労働組合の必要性と正当性」を認める程度であった。大体北カロライナ州の綿工場は小型工場が殆ど（94%）で、大抵500人以下の労働者数であった。

またこの地はW. H. Odumという周知の北カロライナ州立大学教授を中心とする、「貧困」、「労組反対」の土地柄であって、1930年のガストニア郡の「自家所有者」は27～28%のみであって、J. C. C. ニュートン博士の如く「新南部理念」（the New South Creed）を体する「自家所有」（home-ownership）の考え方は殆ど存在しなかった。この点カリフォルニア州では南部のサン・ディエゴは「マイ・ホーム主義者」が多く、ロス・アンゼルス系のラテン系白人でさえ、その78.2%が「自家所有者」であった。

最後にデューク・レイノルズなどのタバコ業者はメソジスト、クエイカー教徒を中心として、チャペルヒル、やがてダラムを中心として繁栄したが、レイノルズは「ナビスコ」へ、これと提携する日本の「ヤマザキ・ナビスコ」の「リッツ」、「オレオ」、宇宙食の「黒あめ」は注目すべきであって、やがてデュークは水力発電の方に向かって行った。「ワコビア」はモラヴィア教徒発祥の地であるが、ワコビア銀行の頭取のR・M・ヘインズは協力を約束したが、ハイ・テクにはさほど積極的ではなかった。

いよいよ本論に入って、1959-63年にハイテク産業のはしりとして成立した州立北カロライナ大学、デューク大学、北カロライナ・カレッジの「北カロライナ学術研究三角地域」の位置を確めよう。デフォーも尊敬したウォルター・

ローリーの州祖の名をとって州都となったローリーには州立大学、ダラムにはデューク大学、チャペルヒルには州カレッジが位置するとしてその間には移動が見られた。「学術研究三角地域」の面積は 2800 ヘクタールの広大な面積を占め、ローリー・ダラム間 45 キロ、ローリー・チャペルヒル間 51 キロ、ダラム・チャペルヒル間 18 キロで、「三角地域」は東西 3.2 キロ、南北 13 キロにわたった。

次に発達の経過を考えて見よう。先づハント州知事が 2 種類の工業にわたって総花的といわれるような発展を計り、即ち半導体、エレクトロニクス産業とバイオ技術、医薬品工業の異なる 2 部門の振興策を 1980 年の始めに打出し、ついでデューク大学のロバート・バル教授が 1988 年に「生命科学」の分野においてスフィンクス製薬会社を起し、有名となった。日本の岡山県の林原の「トレハ・ロース」もいくらかこれに育てられた。この会社は 1992 年には 7500 万ドルの資本金となっており、1994 年には E. Lille 製薬に買収された。バイオ部門の収入は増え、全米で 10% に上り、この州では 14 企業を占めた。しかし従業員数では情報産業の方がバイオ部門より多く、宮田教授によると、2007 年従業員数ではコンピューター・プログラミング部門が 33,000 人、電子機器 9700 人であるのに対して、医療器具 3813 人、医薬品 19,027 人である。日本の Sony Ericsson も 750 人で載っている。

ところがここでも注目すべきはその伝統産業である木工品製造業では 25,296 人、家具製造業では 49,896 人、織物工業ではいまだ 54,817 人の多数の労働者が働いていることである。ハイポイントの家具見本市では現在でも盛況が見られることはジエトロの井上氏の証言で明かである。

ウィンストン・セイレムなどともモラヴィア教徒が多く土着した所やカナポリスやガストン郡では鉄工業と綿工業が隣接して行われていたが、藤井和夫教授は 1864 年のポーランド、ウッジ工業労働者の中、熟練度の高い労働者の出身地の 1/4 以上がモラヴィア地方を含むチェッコ人であると述べている⁵⁾。2003 年に繊維工場が破産してもと工場主のマードックが 2008 年に新研究の

5) 藤井和夫「19 世紀ポーランドにおける工業労働者の形成」(『経済学論究』63 巻, 3 号, 2009 年 12 月), 743 頁。

一層の進捗を計って州立短大を建て、ローリーやダラムでワクチン製造工場を作ってバイオ工業向けの実地の「職業訓練所」を用意した。ローリーやダラム、チャペルヒルなどの東部は「市街地」で新しいハイ・テク産業の中心地となったのである。

尚既述の山内一郎教授は関西学院の院長，理事長を兼ねた人であるが，1963-5年にデューク大学の大学院に留学し，その間「ニュートン・コレクション」を集められた。私がニュートン博士について3回にわたって『キリスト教主義教育』年報に寄稿し，また天川，寺本『社会経済史講義』141-6頁に「J. C. C. ニュートン博士と関西学院大学」を執筆したのは同教授のおかげである。同教授はまたヴァンダービルト大学の「コール・レクチュア」(The Cole Lectur^e)に登壇されたランバース院長の講義‘*Winning the World for Christ-A Study in Dynamics*’を翻訳して『キリストに従う道—ミッションの動態』と題して1989，2004年，関学大出版会より出版されている。

3. カリフォルニア州のハイ・テク研究とサッター

南北に細長いカリフォルニア州の経済発展については北カロライナ州と違った意味においてその開拓者がゲルマン系カラテン系かによって，またその出身地がメキシコかインディアンかによって凡そ3通りの類型が見られるという。シリコン・ヴァレーの半導体や電子工学などの最先端，ハイテク技術の集積をロシア首相が羨望の眼で見たという。同州が経済発展の段階としては最高の段階にあると思われる。それについて1939年に『怒りのぶどう』(*The Grapes of the Wrath*)を執筆したジョン・スタインバックはカリフォルニア州メリーナス生れで有名な私大スタンフォード大学の中退生であった。スタンフォード大学は1891年時のユニオン・パシフィック鉄道の社長であったリーランド・スタンフォード(1824-93)が腸チブスで死亡した英才と唱われた愛児の名前を永久に残すためにエリオット学長と相談して寄付，建設した有名な私大であって，規模1232エーカーの土地を始め，位置はサンフランシスコから60kmの所にあり，ほぼシリコン・ヴァレーの中心地にある。そのスクール・モットーは「自由の風が吹く」であった。工学部長は無線工学の権威フレ

デリック・ターマンである。日本でもこの私大の卒業生が多く、例えば鳩山一郎元首相は 1969 年東大工学部（応用物理・計数工学科）を卒業後、1976-79 年頃までスタンフォード大学に留学し、1981-4 年には専修大学助教授に就任しており、関学大の学長杉原左右一博士は理工学部卒業後、1978-80 年ここに留学している。それに対してサンフランシスコにあるカリフォルニア大学は 100 から成る学部を擁する巨大州立大学であるが、そのバークレー校は工学部として有名で、例えば 2009 年関学大を定年退職した西田稔博士は 1979-80 年にここに留学している。近くのスタンフォード大学と比較すればその違いが分る。カリフォルニア州立大学は 1868 年、即ち日本の明治維新と同年に創立せられ、一般に「研究大学」としても卓越して世評も高いが、例えばその「電子工学科」としては工学部はターマン教授のいるスタンフォード大学に 1 歩譲っている。カリフォルニア大学のモットーは「ここに光あれ！」であった。結局バークレー校の方では半導体や電子工学を無視できないと考え、創立 100 周年の 1968 年に「電子工学科」を新設するに至った。次に両工学部の特色を比較する。他大学からの同大学で合格した博士論文の引用論文数を比較すると次の如くなる。スタンフォード大学は生物、医学で 926 件、物理が 300 件、工学が 162 件であるのに対して、カリフォルニア大学バークレー校では工学が 189 件、化学が 139 件であった（別にカリフォルニア大学のバークレーには「音楽院」が著名で千住鎮雄氏が関係）とにかくスタンフォード大学には I.C. やマイクロ・プロセッサ（ゼロックス）などの発明が集積していた。

ところでカリフォルニア州の開発に当っては後に州都となったサクラメント市の向背が大切であるが、これについては拙稿『経済学論究』63 巻 2 号の『「信仰復興運動」とモラヴィア教徒のリティッツ町の発展』17-9 頁を参照されたい。スイス出身の企業家サッターは寒いバーデン、バーゼルなどの気候を経験したのでやはり「白いエーデルヴァイス」よりも温い「黄金のオレンジ」の方を好んだと思われる。サッターはメキシコの支配者の下で 1839-45 年の間、「新スイス」の名の下で毛織物工場、鍛冶工場、皮革工場、ウイスキー醸造所、ぶどう園のような各種工場の経営を行い、またアメリカ現地人、ハワイ人 1000 人を使って水運の事業を行っており、1880 年に死ぬまでかなりモラヴィア教徒の信仰に

も帰依していたと思われる。これは彼とその夫人の「信仰告白」(Lebens=lauf)を見ないと分らない。それに彼は「賓客歓待」(Gast=freundschaft)の術に通じていた。そこで私はジョン・サッター将軍を「カリフォルニア開拓の先駆者」と呼んだが『怒りのぶどう』(1939年)の日本の新潮文庫の訳者大久保康雄氏がその上巻，453頁にサッターを「カリフォルニアの開拓者」と呼んでいるのは嬉しい。

さて，レディング地域にはドイツ人や日本の駐在員も多く，カリフォルニア地域のシリコン・ヴァレーに至っては関学大卒業生校友会支部まで設立されているが，金門湾のサンフランシスコは自由な金持の無線愛好者が多く集っていてApple, Cisco, Intel, サン・マイクロやI.B.M.などの情報，通信起業家が集中している。少し南のサン・ノゼの4公立短大(community college)の卒業生を補助技術に使える立派なハイ・テク産業が成立しうる。南部のサン・ディエゴ地域には1872年設立の日本人のSony Electronics(2100人)も存在する。カリフォルニア地域は世界一の温和な気候に恵まれて，桃，ぶどう，オレンジ，いちぢくの農園も多く，ノヴァ渓谷にはぶどう酒醸造のみならず，ぶどう栽培か，レーズン製造の農場も多い。私は宝塚に住んでいて「生協」の店に行くとパン袋の中に「カリフォルニア産のレーズン使用」と書いていたり，ぶどうの房の中に「ジェム・シードレスのアメリカ，カリフォルニア州産の種なしぶどう」が出て来て嬉しかった。(レーズン・ウィッチも)

さて，次にアメリカ大学への連邦政府の援助金⁶⁾について述べれば，ジョンズ・ホプキンス大学への「国立保健院」(National Institute of Health)の医学部への援助に始まるが，1970年代に60.9%であって，その時スタンフォード大学には92%という形をとった。当時純工学系の援助は案外少くて16%のみであって，他の84%は皆「生命科学」への割当という形をとった。当時注目すべきエピソードはカリフォルニア州シリコン・ヴァレーにおいてバイオ・テクノロジー(生命科学)の分野において1973年スタンフォード大学のStanley Cohen教授，片やカリフォルニア大，サンフランシスコ校のHerbert Boyer教

6) 宮田由紀夫「技術専有可能性と技術移転—アメリカの産学連携における生命科学に関する考察」(大阪府立大学経済研究，47巻4号，2002年)。

授の「遺伝子組換え」問題が登場した。ところがスタンフォード大学のコーヘン教授は「自分の研究成果は先人の努力の上に積まれたもの」と公言してそれを利益の対象とすることを拒否し、却ってカリフォルニア大のポイヤール教授は R. Swanson の協力をえて 1976 年「遺伝技術研究所」(Genen=tech Institute) と協力し、バイオ技術の応用による糖尿病の治療薬製造法の開発に大手筋企業の前記 Eli Lilly 製薬 (1994 年「北カロライナ三角地域」のスフィンクス製薬を買収した) にライセンスを与え、1997 年 9 億 4000 万ドル、従業員 3000 人の新会社を組織することに成功した。この会社はやがて 2005 年にサン・ディエゴで 595 人の会社を新設する。パーデュー (John Purdue) という実業家はノーベル化学賞受賞者根岸さんも入れて独立戦の英雄「ラファイエット」の名を冠したサン・ディエゴの一区域にパーデュー大学を新設せんとした (後ウェスト・ラファイエット) が、最後にアメリカ最南端の「ティファナ」に大学本部を定める。パーデューの寄贈地は土地、100 エーカーに教授、年棒 15,000 ドルが 10 年分、計 15 万ドルを寄付しただけであってパーデューの態度は「おらが大学」の意識が強く、「教授」を「ボイラー・メーカー」と呼んだりして州知事とも意見を対立させたりした。尤も彼はターマン教授とは親しかったが。

南のサン・ディエゴ地域ではパーデューが入ってくるが宮田教授、139-40 頁によると 2007 年に「生命科学」と「バイオテクノロジー」部門で連邦政府より 9 億ドル近くの資金が交付せられている。Amylin 製薬以下の 10 工場があげられており、Eli Lilly はその 6 番目に出ている。

時代が新しくなるにつれて「ハイ・テク」の内容が工学系 (半導体, エレクトロニクス) よりバイオ技術, 生命科学に移行することが私たち素人にも分るが、その結果大学の教育内容においても変化が見られる。例えば日本においても山内一郎『輝く自由一関西学院の教育的使命』, 52-56 頁において「生命科学の世紀」について詳説せられ、丁度 1963 年デューク大学に初めて留学された当時のアメリカの「ハイ・テク」の新しい息吹きを身をもって体験されている。また「いのち」の話をきくと、関学大が兵庫医大と議義 7 単位の交流を行ったり、「人間福祉」学科を新設したり、また卒業生を対照とする梅田ゼミにおいて「医療の最前線から生命を語る」(8 回) の置かれていることの意義がよく分る。

4. 「信仰復興運動」の将来とフランクリン・グラハム

今から数えて約 30 年前，東京を中心に宣教クルセードを展開した現在 93 歳を越える父ビリー・グラハムと異って，若干若手で平民的な態度をとる息子の Franklin Graham は 58 才の油の乗った専門の伝道師として登場する。2002 年に「ビリー・グラハム伝道協会」総裁となり，それに新しく初めた World Medical Mission と Samaritan Purse の代表に任ぜられ，父の行った「巨大スタジアムや大ホールを会場としないで，各家庭を拠点として活動する」新型の代表が 2010 年 10 月 24 日（前首相の関学での講演より 1 週間後）ここにわれわれと相会した。

北カロライナ州西部の山中の父の家モント・リートを本拠とする。あとは島本千絵さんから贈られた 212 頁の小冊子『フランクリン・グラハム—逃避から希望へ—』（関西フェスティバル実行委員会，2007 年刊）によって説明しよう。

1987 年の東京大会では現在ゴスペル・シンガーの森ゆりさんとその両親も大阪城ホールで回心された。

フランクリンの父のビリーの家はブラックマウンテンの「青い山脈を望む実に美しい場所」（14 頁）にあり，むしろ南にジョージア州都アトランタに至る 85 号線に沿っており彼の卒業したモントリート・アンダーソン短大のアンダーソンに近く（64 頁），北にアシュビル，さらに東北に向ってヒッコリーに達する。この地は 1882 年モラヴィア教徒皮なめし師ガイトナーの移住地，さらにガストニア（曾ての 1940 年織物工場スト中心地），さらに東北には 1741 年のモラヴィア教徒移住地セイレム（1800 年ここで 2000 人のモラヴィア教徒の愛賛会が行われた）を控えていた。すべて付近は山がちであって，東北に広がる州都ローリー，ダラム，チャペルヒルなどの「北カロライナ学術研究三角地域」（1963 年以後）は東部の都市区域にあった。フランクリンは父とは違い「南部の人間であると実感しており」父の推薦した伝統校のニューヨークの「ストーリー・ブルック」を退学し（24，26 頁），4 年制大学も「アパラシアン州立大学」（91 頁）を卒業した。心なしか彼のクリスチャン・ネームの「フランクリン」は「ベンジャミン・フランクリン」を思い出させる。

彼の活動がヨルダンなどの中東地域，イスラム地域への「ツア・コンダク

ター」から初ったのも父と異っていた。ヨルダンに新病院を建設したいと願ったアイリーン、エレノアはフランクリンに相談し、フランクリンは直ちに心から神に祈った。そしたら「お金は本当に必要としている時に与えられた。1週間早すぎることもないの」とアイリーンの返事。(50 頁) こうして祈っているとお金がどこからともなく与えられた。さらにあとで中東の病院増築のために 40 万ドルの資金が必要な時も、テレビ番組のゲストに選ばれたフランクリンが会合を 1 回行ったところ、40 万 9000 ドルのお金がフランクリンの所に届けられた。そこでフランクリンは神に感謝すると共に余った 9000 ドルを神さまにお返しした (120 頁) と。

おおらかな自然の発言であるが、私は実際にそうかも分らないと思うに至った。P・ボイヤーも言っている。「信仰復興運動家はマス・メディア展開の先駆者となった⁷⁾」と。マタイ伝 28 章、19-20 節に伝道、宣教のキリスト教の精神を高々と宣言しているではないか！ (大宣教命令)

「あなた方は行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そしてバプテスマを授け、またわたしがあなた方に命じておいたすべての事を守るように彼らに教えなさい。見よ！ 私は世の終わりまでいつもあなた方と共にいます。」

「高度情報化」時代の現在、三学期に入って善意の新入生用のランドセルの寄附 (タイガー・マスク) が 752 個 (千個ともいう)、献金が 3300 万円に上っていると言うではないか。

未知の国への宣教においてはフランクリン・グラハムの宣教運動も 1741 年のモラヴィア教徒の「ナザレ」の建設も同じではないか？ それからもう 1 つ。フランクリン・グラハムの「ビリー・グラハム伝道協会」の賛助会員 80-100 の中に尾山令仁牧師も加っているが、その息子さんの訳されたリック・ウォレン著、尾山清仁訳『人生を導く 5 つの目的』(2004 年刊)、カリフォルニア州、オレンジ郡牧師の訳書の講読をおすすめします。

7) 天川、寺本『社会経済史講義』(2004 年)、166 頁、*Urban Masses and Moral Order* (1978) より引用。

5. 「聖業」の成立

こうして神に仕える職業、「聖業」(heavenly work)には期せずしてどこからかお金が寄せられ、それも多くもなく少くもなく何とか人類の為に必要な額の資金がどこからか寄付されていることが分った。寄付を募る伝道者が牧師であれ、フランクリンのような「職業的伝道協会人」であれ、その人が真面目な誠意のある—云いかえれば神によみせられる人間であれば、貧しい飢えている人々を助ける為にはこの「高度情報化社会」においては大いに許されることが分った。しかしフランクリンの時代には父の時のように大ホールや巨大スタジアムを使用しないで、また感動した人を段上に集めないで、フランクリン・グラハムのように各自に「決心カード」に自分の回心の詳細な内容を書かせて提出させるだけである。

何といってもキリスト教では聖書テモテ書，1，4，8に「信仰は儲けになる」(くわしくは *Godliness is profitable for all things, having promise of the life that now is, and of that which is to come.*)と約束せられているからである⁸⁾。

私は過去40年に亘って「宗教と経済」の間の関係を考えて来て、最近になってやっと心にひらめいたことがある。それは「この世は余り見捨てたものではない」ということである。2010年8月1日、関学梅田アブローズ館において「経営史学会関西西部会大会」の「スポーツの経営史へのアプローチ」が取上げられ、関学大教授の市川文彦教授が問題提起者となり、高野連会長を長らく担当しておられた脇村春夫氏も「日本のプロ野球における企業家個人オーナー」を取上げられた。勿論、他のプロ・スポーツも対象となるであろう。

この分では「宗教事業が果して儲かる資本家的企業となりうるか?」も大切な問題となりうる。勿論「牧師」の職務や「職業伝道者」の仕事は倫理や道徳を扱う「教育」や「慈善」や「博愛」の問題であって、資本家的「経済」の問題ではない。しかしアメリカのウィリアム・ローレンス聖公会主教は「富の道徳に対する関係」(1901年)を扱い、会衆派牧師のブルース・バートンには *The*

8) 同書，97-8，190-1頁。

Man Nobody knows (1925 年) の著書があつて、キリストを「世界的セールスマン」、「一流のビジネスマン」と賞めている。つまり私は「宗教」と「経済」はどの辺まで近づけるかを問題としたいのである。

私は研究の結果「宗教 (キリスト教) は儲かる」という結論を多くの学者や宗教家が出しているのをこの目で見て来た。以下その 2, 3 を紹介しよう。

先づピューリタンの昔に返って、ヒュー・ラティマー (Hugh Latimer) は 1549 年に「信仰は大いなる利得である」(great gain) と述べた。聖書テモテ書 I, 6, 6 に「信心があつて足ることを知るのは (with contentment) 大いなる利得である」より来る。アイザック・バロー (Isaac Barrow) も「信仰は儲けになる」(既述の Godliness is profitable, テモテ書, I, 4, 8, 「身体の訓練は少しは益するところがあるが, 信心は今のいのちと後の世のいのちとが約束されているので万事に益となる」) と言っている。ついで梅津教授の言から引用すると, G・スィーノック G. Swinnock, *The Christian-man's Calling ; or, A Treatise of making Religion one's Business* 『キリスト者の天職, 即ち宗教を自分の仕事とする論』(1660) と B・アッシュウッド『神聖な職業, 即ち最良の商売』(B. Ashwood, *The Heavenly Trade, or the Best Merchandising* (1688) が同趣旨である⁹⁾。

次いで人間的な啓蒙の時代である 18 世紀に入ると, ダニエル・デフォーとベンジャミン・フランクリンが登場する。デフォーの『イギリス商人大鑑』(1725) とフランクリンの '*Poor Richard's Almanack*' (1733) には資本主義開花期の個人商店の有様を彷彿とさせる諺が登場する。'Drive thy business, let not that drive thee' (Drive thy business, or thy business will drive thee.) や 'Keep your shop and your shop will keep you.'¹⁰⁾ が頻繁に使われた。市井に合う格言であつたが, 少し政治的な言葉は「正直は最良の政策」である。

9) 梅津順一『ヴェーバーとピューリタニズム』(2010 年), 110, 287, 292-4, 298, 306 頁; 梅津『ピューリタン牧師バクスター, 教会改革と社会形成』(2005 年), 198 頁; 天川「ピューリタニズムの本質—「自己審査」について—, 内田義彦編「大塚久雄教授還暦記念Ⅲ」『資本主義の思想構造』(1968 年) 所収)

10) B. Franklin, *Poor Richard's Almanack* (The Century Company) pp.44, 49, 76, 118; 天川『デフォー研究』(1966 年), 391 頁。

‘Honesty is the best policy.’ はよく引用されたが，Sir John Tillotson, Sir Richard Steele, Thomas Baston, A. Smith, B. Franklin が使っている。スミスとフランクリンは経済書に使用している。もっと人間生活一般に使用せられたものには ‘Time is money.’ や ‘Early to bed and early to rise makes a man healthy, wealthy and wise.’ があるが，後のものはこの際「早寝」(Early to bed) が先づあることに留意！

19世紀に入るとスコットランド人の S. Smiles の『自助論』(*Self-Help*, 1859) やその *Character* (1871) や *Thrift* (1875) などが有名である。アメリカでは私が解説したフリーマン・ハントの『価値と富』(F. Hunt, *Worth and Wealth*, 1857), ミルズ『金儲けの術』(J. D. Mills, *The Art of Money-making*, 1872) やクラフツ『今日の成功者』(W. F. Crafts, *Successful Men of Today*, 1883; スピア『成功律』(W. S. Spear, *The Law of Success*, 1885) などがある。クラフツの如きは「宗教は実業であり，宗教の業である。然り，神に仕えることは儲かることである」とさえ述べている¹¹⁾。大体「神への道」と「富への道」が一致すべきものと考えている。

6. 結び

「信仰復興運動」が日本人財閥に与えた影響が大きかったことは1892年のシカゴ万博の時に住友家の当主(西園寺公の実弟，住友吉左衛門男爵)が万博を見学に来ていて大変感激し，これを日本でも寄付によって実行しなければならないと考え，当時住友の所有であった以下の土地と資産を寄付されたものである。その結果私の研究ではデフォーの主著 *A Plan of the English Commerce* 初版(1728)が天王寺府立図書館分館より借りられ，また初め大塚教授所有のタイプ打ちのコピーを借りていた『イギリス商人大鑑』を大阪市大のゾンバルト文庫の5版を，後メンガー文庫の2版を借用できて研究に非常に便益を受けた。住友財閥のシカゴ万博訪問については当時『毎日新聞』の2頁大で日々

11) 天川「19世紀中葉のアメリカにおける経済倫理—ハント『価値と富』とスピア『成功律』—」(『経済学論究』28巻，1号)；同「19世紀末のアメリカにおける経済倫理—ミルズ『金儲けの術』とクラフツ『今日の成功者』—」(同，28巻，4号)。

的に報ぜられていた。

尚鳩山前首相は 2010 年 10 月 18 日に関西学院を親しく訪問せられ、460 人の学生を前に「今こそ国を開け！」と講演せられた。会場は大いに盛り上がり、前首相は「若者は外国向け志向になってほしい」と熱弁を振われたという。

尚私たちは「ハイ・テク」のことは分らずに困っていますが、日本でも岡山で「夢の糖」トレハ・ロースが開発せられ、佐賀では甘いトマト、長野の甘いレンコン、富岡の甘いくわの実が有名となっています。「ハイ・テク」、「電子機器」のことも教えてほしいと希望します。

東京学芸大学の矢ヶ崎典隆教授の力作¹²⁾によれば、San Diego は 1769 年に創建せられ、1860-62 年にカリフォルニア州知事であった John G. Downey 氏は「ランチ」を分割して 1865 年 Downey 市を創設され、さらに 1868 年（ちょうどカリフォルニア州立大学の創設の年で「明治維新」に当る）に‘*Rancho de la Nacion*’をサン・ディエゴ市に近い南に創設した。今これを‘National Rancho’と呼んでいる。

12) *Origins of Cities and Urbanization in 19th century Southern California*, pp.205, 210, in *The Japanese Journal of American Studies*, NO. 19, 2008.